

柿 生 文 化

柿生郷土史料館 情報・研究誌
 住所: 川崎市麻生区上麻生 6-40-1
 柿生中学校内
 電話: 044-988-0004(柿生中学校)
<http://www.kakio-kyodo.com>
 第79号

失われゆく記憶遺産～その4

「神社」は郷土のルーツを知る語り部: 岡上の場合 (3)

** 岡上神社創設以前の各神社が語るナゾ **

前号、前々号では、明治時代、岡上村に祀られていた剣(つるぎ)神社・諏訪神社・日枝(ひえ)社・宝殿稲荷社・開戸(かいと)稲荷社の五社を支える村民の知恵と協力で、岡上神社を創設し、村社廃止の危機を乗り越えたというお話をいたしました。

しかしそれは、明治時代末期のお話です。明治時代以前から存在していたと思われる岡上の五社はいったいどのような由来があって岡上村に登場したのでしょうか。きっと古い時代に何らかの意味があって、それぞれその場所に祀られたはずです。今回は、岡上五社の由来を考えてみましょう。ただし、正確な情報を得ているわけではありませんので、一般的な資料をもとに推測をしてみました。

剣神社は珍しい名称の神社です。近くには横浜市青葉区荏田に同名の神社があるだけで、神奈川県内には他に見あたりません。

全国の分布を調べてみますと現在は、福井県に15社、徳島県に2社、山口県・鹿児島県にそれぞれ1社ずつ見ることが出来ます。福井県には主に西部の敦賀市と丹生(にう)郡に集中して分布し、剣に関する古い伝承も多く見られます。製鉄や剣の製作については忌部氏とのつながりが深く、周辺地域には古代製鉄遺跡が多数分布しています。一方、徳島県に在る剣神社は、かつての阿波国麻植(おえ)郡の近隣に位置している美馬市木屋平と三好市東祖谷山村の二カ所です。いずれも平家との関わりが強いとともに、麻の生産を主産業とする阿波忌部氏が深く関わってきます。阿波忌部氏はやがて千葉県のア房に移住し、更に鶴見川流域にも進出して開発をすすめ杉山神社を建設しながら入植したものと考えられています。

以上、福井県・徳島県の例を見てみますと岡上村の剣神社は古代忌部氏との関係が強い事が想像されます。岡上の剣神社に関して、江戸時代後期の「新編武蔵風土記稿」岡上村の項には「もと、剣を御神体としていたが、今は御神体はなく、本地不動(御神体の大本である不動明王)を置いてあるが、それは村民の宮野某氏が納めたものである」と記述されています。一方、荏田村の剣神社については「昔、陸奥国の炭商人が、鎌倉の刀鍛冶より剣を一振りもらい、国への帰途、眠くなり道端で眠ってしまった。その時、松の上から大蛇が襲いかかろうとしたが、貰った剣が自ら大蛇に向かっていき大蛇を退治した。やがてその剣を祀った」と記載され、いずれも剣に関する伝承が在ります。

総合的に考えてみますと、忌部氏と深い関係があり、不動明王を祀っている剣神社は、鶴見川流域に存在する杉山神社(不動明王を祀る社が多く忌部氏が関わる)と深い関連があることが考えられます。岡上の「杉山」「杉山下」という字名(あざめい=字は村の中の区画名)も何か両神社の関係を感じさせます。一方、徳島県には「杉尾神社」「梶(すぎ)尾神社」という神社が20社ほど見られますが、これも何か関係があるのでしょうか。

次に諏訪神社です。この神社は日本全国にたくさん見ることが出来ます。諏訪神社は長野県諏訪湖畔に鎮座する狩猟・農耕の神様です。川崎市に隣接する都筑区東山田の山田神社は諏訪神社が合祀されており、甲斐・信濃で活躍した武田家の旧家臣の子孫も多く、この地域に在住しています。それならば、岡上も武田氏との関係が考えられないでしょうか。

日枝社は一般に日吉神社ともいわれ、祀られている神様は古くから比叡山(日枝山)に鎮座した地主神(じめしのかみ)で、各々の土地の守護神でした。また、天台宗の護法神(仏教の教えを守る神)を祀るともいわれます。そして、天台密教との関わりを持つ修験者(山伏)とのつながりも考えられます。例えば、岡上村の日枝社近くにある「山伏谷戸」という地名がその関係を物語っています。



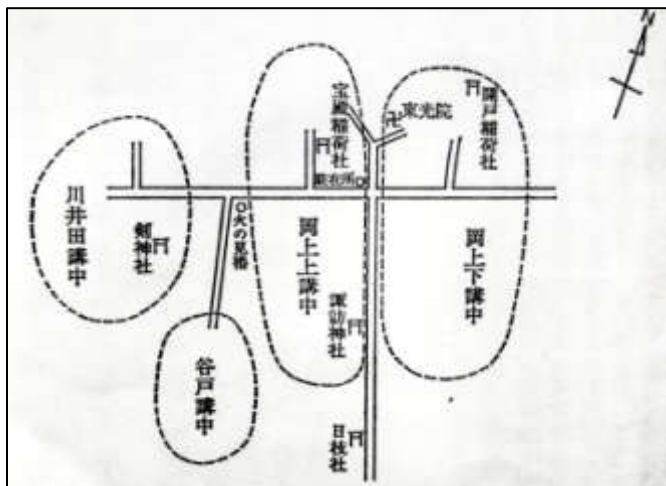
宝殿通り

宝殿稲荷は、真言宗東光院の宝殿(宝物殿)に関係ありそうです。稲荷信仰は真言宗と深い関係があるからです。

最後に開戸稲荷ですが、「開戸(かいと)」とは、「開墾地」を意味する地名と考えられ、岡上地域を開拓した人々が豊作を願って建てたのでしょう。こも東光院との関係が深いと思われます。

いずれにしても、神社はそれぞれの地域で意味を持って建てられたことは間違いがありません。何らかの祖先の思いが、その社を造り上げたという事は間違いなことだと思います。(文:板倉)

(参考資料:「神社辞典」「新編武蔵風土記稿」「福井県史」)



合併以前の各社の位置

シリーズ

「麻生の歴史を探る」第49話

麻生郷 ～本郷・堀内～

小島 一也 (柿生郷土史料館相談役)

今に残る上・下麻生地内の地名を調べてみますと、下麻生に「国領」の小字があり、上麻生にも「こくりょう」と呼ぶ通称地名があって、それは現真福寺川から西、麻生川沿いの上麻生亀井、仲村境の耕地橋辺りまでがその地域となります。川崎市地名辞典では国領とは「中世国衙領の遺構」と記しており、したがって本郷とは国領だったことを意味し、尊氏は建武中興の恩賞で得た麻生郷のうち現下麻生の約半分、そして現上麻生亀井の全域を保寧寺領としたこととなります。

堀内とは辞典では武士の館、大きな建物のある所とされますが、上・下麻生には堀内の地名はありません。しかし隣接の早野には「堀内」という小字があり、「西の方一帯を言う」と記されています。西の方というと現東柿生小学校辺りを指し、この地は王禅寺の丘陵が鶴見川流域に張り出た低い台地で、古くから縄文、弥生の遺跡があり、平成5年体育館建設の調査では14～15世紀の青磁器、祭事用の土師器などが発掘され、この時代、この地に有力な寺院があったことが証明されています。

一方堀内を地名ではなく武士の館とするならば、当時の往還(かながわ道)に沿う上麻生こくりょうの地域は、鶴見川に面し、地理的にも地形的にも恵まれた地勢の地で、現月読神社から常安寺、そして「亀井館」への一連の地は郡衙に代わる郷の代官屋敷があったとしても不思議はなく、とりわけ亀井館が注目されてまいります。



下麻生字国領

この麻生郷本郷で当時乳牛が飼われ、税(乳牛役)があったことには驚きますが、調べてみると古来日本には牛が生息していました。家畜化は欽明天皇の御世(531年)仏教伝来とともに百済からの帰化人が牛乳の効力を教え、孝徳天皇(644)に牛乳から精製した酥(そ・チーズ、バター)を献上したのが始まりとされます。文武天皇の大宝律令(701年)における厩牧令(くもくりょう)では酥を医薬品として乳牛を飼育することを奨励しますので、この地方の宮牧であった立野牧や石川牧などでは乳牛が飼育され、酥の生産があったに違いありません。平安時代この乳製品には貢酥(税)の制度(延喜式)が設けられ、全国に割り当てられた貢酥の記録が京都牛乳院に残されているそうです。しかしこの貢酥の制度



下麻生村岐点(国領辺) 明治13年地図

は律令国家の衰退とともに衰退していきます。牧は荘園となって武士の発生を生み、武士は牛よりも騎馬を必要とすることに加えて食生活の変化もあって、酥の生産は減少し、室町時代には貢酥の制度は形骸化しています。従ってこの麻生郷本郷での乳牛飼育は小規模で、その終息期にあったのではないのでしょうか。そのことは乳牛役と名を変えた貢酥が前年通り免除すると記された保寧寺文書で窺い知ることができます。

麻生郷本郷の堀内とするところがどこであるかは今後の研究課題と思います。

前述した東柿生小学校域にあった有力寺院は王禅寺ではなく薬師寺だったという説があります。王禅寺は人里離れた真言密教の大刹で、他宗(臨済宗)の保寧寺領付近に寺を建てるはずがなく、さらに元弘3年(1333年)新田義貞が焼いた寺は鎌倉幕府所縁の寺である薬師寺だったとするものです。

この地の東、王禅寺6-9尾作家の屋敷内には今も「牛塚」と呼ぶ小祠があり、乳牛役、薬師寺とロマンを残し、下麻生国領に続く、だるま市で有名な木賊(とくさ)不動は応永年間(1400年頃)鎌倉公方の庇護で火伏せ信仰が始まったとも伝承されるなど、前述の上麻生こくりょうの地を含め、「堀内」は現在厚いベールに包まれています。

参考文献:「川崎地名辞典」「川崎市史」「日本人と牛乳」(森永乳業)



東柿生小学校用地出土品

シリーズ 黒船来航

開国秘話 (15)

小林 基男(柿生郷土史料館専門委員)

◆後日談その3 開港後の横浜◆

横浜村は、現在の横浜市の市域に、およそ 220 ヶ村ほどあった村々の1つでした。戸数はおよそ 90 戸。半農半漁の小さな村でした。

幕府は、この地に新たな港湾施設と外国人居留地を設けることを計画、9万両を投じて湿地帯に土を入れ、道路を敷いて区画を整理し、開港の日に間に合わせたのです。そこには、外国人貿易商のための、仮宿舎まで建設する念の入れようでした。この計画を実現するため、横浜村の住民は、村ぐるみで山手の本村(現在の元町です)に強制的に移住させられました。90 戸ほどの村人たちは、農地や海での生活の場を失ったのですが、外国人居留地の整備と共に、横浜にやってきた外国人相手の仕事が多々あることに目を付け、幕府から支給された作徳料(補償金です)を元手に、パン屋、西洋菓子屋、仕立て屋、クリーニング屋、床屋、写真館、家具屋、食堂、それに横浜見物にやってくる日本人相手の土産物屋などなどの店を開き、見事に今日の元町の基礎を築いたのです。

日米修好通商条約は、日米両国の交渉と合意によってまとめられた条約でしたから、政治的な恨みがなく、幕府も日本の商人たちも、横浜を含む開港地では、積極的かつ具体的な手を打つことができたのです。神奈川から場所だけ移されましたが、先手を打った幕府の対応に、横浜にやってくる外国人居留民からは、何の不満も出なかったのです。彼らは横浜居住を歓迎しました。この点は、日本の国家主権の維持のためにも、大きなプラスとなりました。

都市整備を先導し、その一定区画を外国人に貸与する準備も済ませていました。この準備の良さは、外国商人らに歓迎されました。この点も日本側の大きな得点でした。それは上海租界のように、国内の一定地域に外国人の権限が生じる「治外法権」の状態ができることを防げたからです。

この横浜では、開港の翌年 1861 年に、内外の関係者を集めての、開港祝賀会が盛大に開かれ、開港が祝われました。この祝賀会に出席したのは、貿易商人ばかりではありません。外科医で、最初の和英辞書を作成したヘボン、横浜～新橋間の日本最初の鉄道を敷いた鉄道技士のモレル、日本近代水道の父と讃えられるパーマー、都市計画のプラントンらも、この祝賀会に出席していました。

彼らは、横浜や日本の持つ魅力に惹かれ、自らの技術や能力を、惜しげもなく注ぎ込んで、日本の変貌を支援するために、全力を傾けたのです。

こうして、欧米人、中国人そして日本人が、共に開港を祝ったことで、条約に記された神奈川とは横浜のことであるとする幕府の主張は、既成事実として承認されたのです。

中国では、外国人と共同の開港祝賀会など、ついぞ開かれたことはありません。敗戦に伴う屈辱の開港でしたから、中国人に祝う気持ちの湧きようはなく、欧米人も中国人との交流よりも、ひたすら金儲けに熱中していました。

上手に「近代」に適応した日本人にとっては、「近代」は輝かしい希望に繋がりました。翻って中国人にとって、「近代」は悲惨と屈辱でしかなく、抵抗すべき対象として受け止められました。彼らにとっての輝かしい希望は、「近代」の終焉後に見出すべきものとなったのです。

先見の明のある決断は、後代に幸いを齎しますが、逆の決断、先見の明のない決断は、災いしか齎しません。施政者の資質で、特に大事なものは、まさにこの点です。

横浜には、アジア特に中国の文化も存在していました。後に中華街に発展することになる、中国人が集住する一廓も、外国人居留地の線引きの中に、きちんと含まれていました。そこには、芝居小屋や中華料理店があり、当時のお多くの日本人が憧れていた、中国文化への渴望を癒すことが出来たのです。伝統的な中国文化と、新しい欧米文化、この双方が同時に横浜に移植されたのです。横浜には「世界」があったのです。

横浜は短期間に大きく発展しました。開港時に戸数 90 戸、人口 500～600 人程度に過ぎなかった横浜は、1889(明治 22)年に、市政に移行する段階では、人口 12 万人に及ぶ、大都市に成長していたのです。(完)



開港から4年 1863(文久 3)年の横浜全景 (フェリーチェ・ベアト撮影) 下図は上図右半部分の拡大



柿生郷土史料館をご支援下さっている法人会員をご紹介します

温かいご支援に感謝申し上げます

11月1日現在 59法人(順不同・敬称略)

- ★ノジマNEW鶴川店★FISH・ON!王禅寺★まつや★孝友商事★美容院 Luci★レストランベル★とん鈴
- ★神奈川トヨタ自動車(株)麻生店★フラワーショップまきば★ガスト柿生店★ラーメン信華★小料理わかば
- ★広東商事★菊川園★サイトウ農芸★ブックポート203栗平店★カラオケゆう
- ★柿の実幼稚園★柿生保育園★川崎青葉幼稚園★和光大学附属梅根記念図書館・情報館★桐光学園
- ★(有)白百合商事★誠和産業(株)★杉本電気管理事務所★(有)青戸建材店★(有)荒川電気工事★(株)カジノヤ
- ★朝日ホーム★(株)三共エステート★栄運輸(株)★(株)ティエムコーポレーション★(有)柿生恒産★(有)山義産業
- ★(有)粕谷住宅資材★エムケープリント★プライマリー(株)★川崎信用金庫柿生支店★(有)志田電子製作所
- ★長瀬敏之土地家屋調査士事務所★JAセレサ川崎柿生支店★(株)ささらプロダクション★(有)麻生自動車
- ★リック設計企画(有)★(株)ホシノ商会★(株)北島工務店★奈良工業★(株)観財★(株)スズユウ商事★(有)栄和
- ★月読神社★琴平神社★王禅寺★浄慶寺★常安寺
- ★虹の里養護施設★麻生総合病院★たま日吉台病院★アルナ園

柿生郷土史料館開館日のご案内

◎開館日：偶数月は毎土曜日、奇数月は毎日曜日

12月 6・13・20日(毎土曜日) **1月** 11・18・25日(毎日曜日) 12月27日、1月4日は休館

◎開館時間：午前10時～午後3時

柿生郷土史料館11月以降の催物ご案内 (入場無料)

第8回 実物のミニ歴史資料展

本居宣長と国学の世界



◆展示品：「古事記伝(写本)」「直昆霊(なおびのみたま)」「詞の玉緒(ことばのたまのを)」「馭戎慨言(ぎょじゅうがいげん・からおさめのうれたみごと)」「祝詞考(のりとこう)」「古史成文」 他

◆期 間：10月4日(土)～12月13日(土)の開館日

◆内 容：「国学」は、江戸時代中ごろから起こり、古来からの日本独自の文化を探求し、日本本来の姿を追求しようとした学問です。それはやがて明治維新の原動力ともなりました。展示物で国学の世界を感じ取ってください。



第50回 カルチャーセミナー

鶴見川流域文化探訪シリーズ(2)

鶴見川流域の鉄文化を探る

■■■ 科学の目が解き明かす流域文化 ■■■

- ◆講師：伊藤 薫 氏 (日鉄住金テクノロジー)
- ◆日時：12月20日(土) 13時30分～15時30分
- ◆会場：柿生郷土史料館特別展示室
- ◆内容：Φ鶴見川流域の鉄文化の可能性と痕跡を考える
Φ鶴見川支流域に砂鉄文化はあったのか



西ノ谷戸遺跡出土の鉄製品

第51回 カルチャーセミナー

鶴見川流域文化探訪シリーズ(3)

「花子とアン」(NHK 朝の連続ドラマ)と横浜

■■■ 小机が生んだバイブルの村岡さん ■■■

- ◆講師：平井 誠二 氏 (大蔵精神文化研究所研究部長)
- ◆日時：平成27年1月18日(日) 13時30分～15時30分
- ◆会場：柿生郷土史料館特別展示室
- ◆内容：村岡花子と横浜小机にあった村岡家の姿をお話しいたします

